

平成30年度 広島文化学園子ども・子育て支援研究センター／
私立大学研究ブランディング事業・子ども子育て教育福祉研究部門 合同講演会（講演要旨）

2E教育の考えからの特別支援 —発達障害のある子どもの才能を活かす—

関西大学文学部／大学院心理学研究科教授

講演者：松村 暢隆（まつむら のぶたか）

日時：平成30年7月14日（土）

場所：広島文化学園 広島 長束キャンパス

松村 暢隆氏のプロフィール

京都大学 文学部哲学科卒業

京都大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程修了

文学博士

子どもの心の理論等に関する認知発達の研究から、アメリカの多様な才能・知能理論と才能教育、さらに発達障害と才能を併せもつ生徒の「2E（二重の特別支援）教育」に関する研究へと展開。認知的個性を活かす観点から、才能教育、特別支援教育、個性化教育を繋ぐ教育実践研究を探究。



講演中の松村暢隆教授

【要旨】

2E（トゥーイー；twice-exceptional）児は、発達障害と才能を併せもち、発達障害に応じる特別支援教育（special education）と才能に応じる才能教育（gifted education）の両者を同時に考慮した2E教育の対象となる。才能に応じる教育を考えると、才能の定義が必要となるが、アメリカ連邦教育法1978年改正「初等中等教育法」（ESEA, PL 95-561）では、「知能、創造性、芸術の能力、リーダーシップ、特定の学問（教科）領域の能力のいずれかにおいて、優れた遂行能力の根拠を示す顕在的・潜在的能力をもち、ふつうの学校で提供されないサービス・活動を必要とする」と述べられている。対象となる子どもたちは、あらゆる文化・経済的集団に存在しているが、その対象者数や比率、対象とする才能の種類などは実施されるプログラムの許容量によって恣意的に変わる。しかし、上記の領域に各々数パーセント存

在すると仮定し、全体で1割以上と推測される。

わが国の才能教育の在り方を考えるとき、これを狭義の才能教育と広義の才能教育に区分しておくべきと考えられる。前者はIQ、標準化された学力検査や指標に基づく行動観察などの公式の方法で識別し対象者を選抜して行うもので、上位学年の科目の早期履修・単位取得を認める早修（acceleration）と、通常より広く深い教育を行う拡充（enrichment）がある。なお早修の例として飛び級・飛び入学などがある。一方、後者は才能を公式の方法で識別することなく、個人の得意・興味を伸ばして活かすもので、個人学習・班学習・プロジェクト学習・土曜日や夏期プログラム・コンテストなどが挙げられる。早修と拡充は学校内外の連携や小一中一高一大の連携に基づく指導や学習の場で個人のニーズに応じて提供される。

BaumとOwen（2004）は2E児が見落とされる



講演中の様子

状態を三つのタイプ：①障害には気づかれるが才能には気づかれない、②才能は気づかれるが障害は気づかれない、③平均的に見えて才能も障害も気づかれない、に分類している。これに前述の狭義と広義の才能の考えを加味すると、全パターンを以下のようにとらえられることができる。①診断・識別された障害と才能を併せもつ（狭義の2E）、②潜在的な障害と才能があるが、両者は診断・識別されていない（広義の2E）であり、②はさらに、A)才能は識別されるが障害は平均的に見える（未診断やグレーゾーンを含む）、B)障害は診断されるが才能は平均的に見える、C)障害・才能とも診断・識別されず平均的に見える、に分類できる。

2E教育の実践も狭義と広義に分類され、前者の2E教育は、公式のプログラムとしては、日本の学校にはまだ存在していないが、高偏差値の生徒が集まる進学校では、高学力は識別され、発達障害やその傾向のある生徒がある程度含まれており事実上すでに2E教育の機能が働いているといえる。アメリカでは予算上の制約があるため、広く普及しているわけではないが、例えばメリーランド州モンゴメリー郡では1987年から、公立学校に導入されている。ここでの特徴は大規模校の校内に、才能と障害特性を理解し合える生徒の小集団の居場所をつくり、ここで教師と生徒の信頼関係を育んでいる。一方、2E教育を理念として取り入れている私立学校は数多く存在し、全米ですでに数十校になる。ここでは発達障害児のみ入学させ、高卒の資格を取得させ大学進学を支援しており、高く評価される一方で短所として、学費が高い、子ども同士で社会的関係形成の経験が不足

する、特別支援の場・集団が固定される、テスト学力の訓練重視に傾くなどが挙げられる。

つぎに狭義の2E教育を行っているロサンジェルス郊外の私立学校（ブリッジズ・アカデミー、Bridges Academy）の活動が紹介された。ここでは一部広義も含め狭義の2E児が入学し、少人数制で4年から12年までの教育を以下の戦略で行っている。それらは①知的環境を創ること、②物理的学習環境を調整すること、③支援的情緒的環境を創ることなどである。③における環境とは生徒が尊重され受け入れられていると感じるような雰囲気提供のことである。これらの戦略のもと、異質才能チームで活動の選択肢を増やしている。

次に日本の大学における修学支援について富山大学の取り組みについて紹介された。同大学では発達障害学生を2Eの観点から捉え直し、学生支援センター内にアクセシビリティ・コミュニケーション支援室を設け、社会参入支援を行っている。また、同大学では高校教員向けの入試懇談会やオープンキャンパスの大学体験プログラム（チャレンジ・カレッジ）、入試合格直後からの修学支援も活発に行っており、これらの活動内容は、高橋知音（2014）の著書「発達障害のある人の大学進学」のなかで詳述されており、ご参照いただきたい。なお現在、関西大学のみならず、全国の多くの大学において、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由学生や発達障害学生の支援を合理的配慮の理念のもとに行っているが、ここでも広義の2E教育として捉えなおすことが必要であることが強調された。

つぎに通級指導教室での試みが紹介された。通級指導教室では才能を活かす拡充（enrichment）の例として、才能を考慮し個性化された学習支援と心理的な安定を図る社会情緒的支援の組み合わせのもとに行う試みや、横浜市のサマースクールにおいて「映像をつくろう」という課題をグループでアイデアを出し合い協力して取り組ませるなど注目すべき活動が紹介された。これら活動の詳細は2018年11月刊行予定の著書に紹介しているのでご参照いただきたい。

最後に、2E教育の理念を活かすための、「障害＋才能」から「障害×才能」へというアイデアが紹介された。これは「障害への対応＋才能への対

応」、つまり「障害+才能」という支援では不十分であり、「才能を処遇した、障害への支援」および「障害を処遇した、才能への支援、」つまり「障害×才能」が望まれ、これを実現するための特別に工夫した方法と場が必要であることが述べられた。例えば、読みや算数の困難について、2E生徒の学習スキルと楽しさを高めるために、2E教育研究を行ってきた「ベリン・ブランク（才能教育）センター」（Belin-Blank Center）は、以下のような指導・学習上の方法、配慮を推奨している（Assouline et al., 2012）。それらは、①進んだレベルの学習教材を提供する、②適度にゆっくりした時間をかける、③興味のよく似た他の生徒とペアを組む、④興味のある領域（とくにノンフィクション）の本を読んで、教師や友だちと話す、などである。さらに、2E生徒には、早修としてAP（高校生が大学レベルの科目履修）等や飛び級までも有効な場合があるが、その際には障害に対応した合理的配慮（例えば試験時間の延長）が必要だが、最近の研究で示されている（Foley-Nicpon & Cederberg, 2015）。

（文責：眞田 敏）

文献）

Baum, S. M., & Owen, S. V. (2004). *To be gifted and learning disabled: Strategies for helping bright students with LD, ADHD, and more*. Mansfield Center, CT: Creative Learning Press.

高橋知音. (2014). 発達障害のある人の大学進学. 金子書房.

松村暢隆. 編 (2018). 2E教育の理解と実践. 金子書房. 11月刊行予定

Assouline, S., Foley Nicpon, M. & Fosenburg, S. (2012) The paradox of twice-exceptionality: Packet of information for professionals (2nd ed.) PIP-2). Iowa City.

Foley-Nicpon, M. & Cederberg, C. (2015) Acceleration practices with twice-exceptional students. In S. G. Assouline, N. Colangelo, J. VanTassel-Baska & A. Lupkowski-Shoplik (Eds.) *A nation empowered: Evidence trumps the excuses holding back America's brightest students*, Vol. 2. Iowa City.